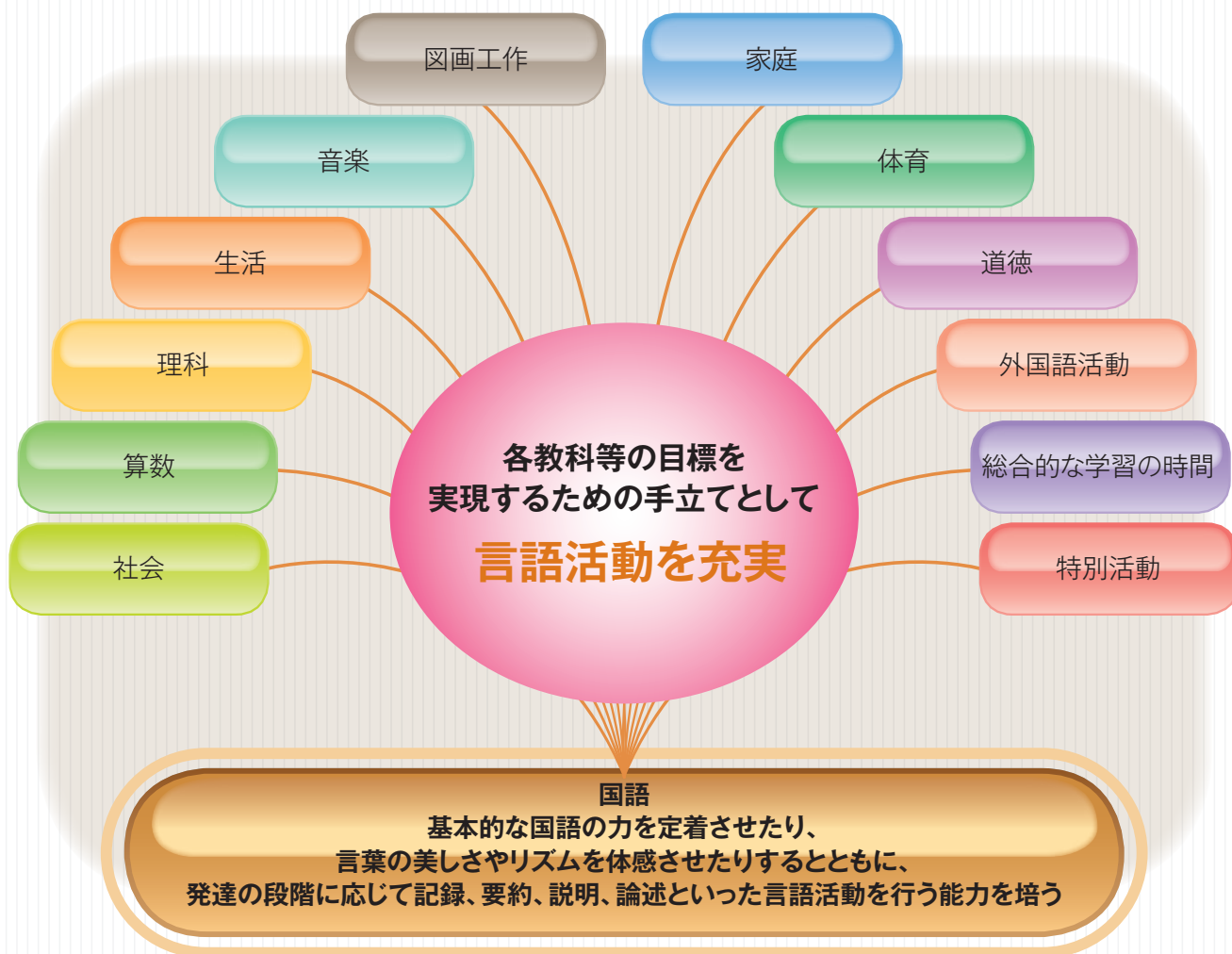


## 各教科等における言語活動の充実



文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【小学校版】」より

表現力などに課題があることが判明しました。これらの力を育てるためには言語活動を効果的に行う必要があります。

三つ目は、教育基本法が改正され、教育の目指す方向が明確になり、学力についてもはっきりと定められたことです。学習指導要領の教育課程編成の方針は、学校教育法に規定されたことによつて打ち出されたものです。言語活動の充実を図ることで育つ学力が、法の上でも明記されたということになります。

### 国語科だけでなく 全ての教科で実践を

言語活動の充実を図る上で大切なことは「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を通して、思考力、判断力、表現力などを育むことです。したがつて事柄同士を比較・分類したり、関連付けたりしながら話す、書くといった学習活動が重要となります。

また、国語科だけでなく、全

ての教科等で取り組まなければなりません。例えば、国語科で示されている記録、要約、説明、論述等の言語活動は、社会科や総合的な学習の時間などでも行います。実際、新しい学習指導要領には、「観察、調査、見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図る」(社会科)、「図形の面積の求め方を言葉、数、式、図を用いて考え、説明する活動」(算数科)などが見られます。

### 豊かな教育活動に つながっていく

言語活動の充実は、あくまでも各教科等の目標を実現するためのものであり、思考力や判断力、表現力などを身に付けさせるための手段です。しっかりと話し、聞き、書き、読む活動を位置付けることによつて、思慮深い、賢い児童生徒を育てていきたいものです。「言語活動の充実」は「授業の充実」、ひいては「教育活動の充実」につながっていきます。

## 教育最前線



# これからの 学校教育に求められる 「言語活動の充実」



きつ かわ よし のり  
**吉川芳則**

小学校教員養成特別コース教授



学習指導要領が10年ぶりに改訂され、小学校では平成23(2011)年度から、中学校では24年度から新しい教育課程による授業が実施されています(高校は25年度から)。今回の改訂の柱の一つに挙げられたのが、各教科等における「言語活動の充実」です。

## 「言語活動の充実」とは

言語活動とは、広い意味で「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を指します。新しい学習指導要領の総則には教育課程編成の方針として、次の点が示されました。

▼生きる力をはぐくむ

▼基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得させる。そして、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむ

▼主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努める

これらの教育を行う際に

「言語活動を充実すること」とされています。

## 言語活動を重視するようになった要因

学習指導要領の改訂で言語活動の充実を重視するようになった要因として、次の三つが挙げられます。

一つ目は、新しい知識や情報、技術が飛躍的に重要性を増す時代(知識基盤社会)になったことです。変化に対応していくためには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が必要です。このような力は言語活動を通して着実に身に付けていきます。

二つ目は、国内外の学力調査の結果です。OECD(経済協力開発機構)が3年ごとに実施している国際的な学力調査(PISA調査)で、日本の生徒は読解力に課題が見られました。また、文部科学省の全国学力・学習状況調査では記述式問題に弱いという結果が出るなど、いずれも思考力や判断力、



こめ だ ゆたか  
**米田豊**  
授業実践リーダーコース教授

## 社会科における 言語力の育成 — 評価できる言葉の力を —

**新**しい学習指導要領では、「言語活動の充実」が改訂の大きなポイントとして取り上げられています。小・中学校の教育現場では、学校を挙げて研究テーマにしているところが多くなっています。「活動あって学びなし」と総合的な学習の時間が批判されて久しいですが、その原因は「汗を流し、楽しく時には感動で心に響く学習なのに、うちの子どもは賢くなっているのだろうか」という保護者の声に代表されるように、学んだことが方向的にしか評価されないことにあります。「言語活動」としないで、「言語力」として子どもに付いた力を評価するように考えれば、学校で賢くなった子どもの姿を示すことができます。

そこで、社会科における言語力を「読取り」「解釈」「説明」「論述」の4つの構造(レベル)で、次のように示せば、子どもの姿が評価できると提案します。

- ① 読取り 「資料からあなたは何を読み取れますか」(When, Who, Where, What)
- ② 解釈 「資料からあなたはどのようなことが解釈できますか」(How)
- ③ 説明 「なぜ、このようになっていますか」(Why)
- ④ 論述 「あなたは、このことについてどのように考えますか」

①から③までは、これまでの社会科の授業で行われてきたことです。最も重要なのは、社会事象に対して「なぜ(Why)」と問い、原因と結果の関係で答える「説明」です。その基盤に「読取り」と「解釈」があります。読取りや解釈の段階で授業を終わらせないで、「説明」の段階にまで高めることが大切です。④の「論述」とは、①②③で習得したことを活用して、社会的な論争問題に対して自分の意見をまとめて論述し、発表することです。

このように社会科における言語力を構造として捉えれば、子どもに付いた力のレベルを評価することができ、次の授業に活かすことができます。

## 公立小学校の研究実践

行ったのだと思います」というのではなく、そこに根拠を見いだし、「いつもだったら兵十の家の中に入らないのに、その明るく日は兵十の家の中に入って土間にクリを固めて置いています。それは、クリやマツタケを置いているのは自分だと兵十に気付いてほしかったからだと思えます」と言うことで、判断に至った経緯(根拠)が明示され、論理的に思考されたことが言語によって具現されたと評価できるのです。このように目に見えない抽象的な「思考」というものを、ことばを介して運用できるようにすることが論理的思考力の育成と考えています。

こうした力を獲得させるためには、単学級ではなく、学校全体で継続して取り組む必要があります。大久保小学校では授業研究はもとより、朝のスピーチや委員会活動など日常生活にも視野を広げています。子どもたちの素直な気持ちやひらめきを大切に、思いや考えとして、確かに相手に伝えることができるようになると願っています。

## 附属小学校の研究実践

がさらにつながるのでないかと考えています。「言語感覚」を磨くとは、子どもが多種多様なことばを吟味し、自分なりの根拠を持つてことばを使ったり受け止めたりすること、言い換えれば一つ一つのことばにこだわっていくことと考えられます。

つまり、一つ一つのことばにこだわり、言語感覚を磨くことにより、子どもたちの表現力が豊かになり、「ひと・もの・こと」との「かわり」が深まることで、学びが豊かになると考えます。このことは国語科だけでなく、学べることでではなく、他教科・領域の学習においても変わりありません。子どもたちが「かわり」の中で学びを豊かにしていくためにも今、言語感覚、ことばの力が求められていると考えます。



「壁新聞の発表会」の様子。3人1組でテーマを決め記事を収集。割り付け、見出し、絵や写真、アンケート結果のグラフ化など、分かりやすく伝える工夫をして新聞を作成。内容を発表し合い相互評価をしました



おおえ みよこ  
大江実代子さん  
明石市立大久保小学校主幹教諭  
平成21(2009)年大学院修士課程言語系コース(国語)修了

## 論理的思考力の育成 「ひらめき」を「考え」に

### 現

在、明石市立大久保小学校では、ことばを介して思考力を高めるという観点から、「思考力を鍛え、感性を育む」という研究テーマの下、論理的思考力の育成に取り組んでいます。子どもたちが、直感(ひらめいたこと)を筋道立てた一つの考えに導くのが論理的思考力です。論理的に思考するために、子どもたちには思いつきで話したり動いたりするのではなく、「ちょっと待てよ」と自分でストップをかけようとして促しています。このいったん立ち止まって考える時間が、ひらめきをひとまとまりの考えに変換させる時間になります。この場合のひとまとまりの考えとは、根拠や理由が整い、そこから出された考えを指します。

国語科では、物語や説明文を問わず、一つの言葉や文を自分なりの言葉で表す、そしてそれについての自分の考えを持つて集団での話し合いに臨むという学習を繰り返しています。例えば、4年生で学習する「こんぎつね」の最終場面では、ただ「おれなんだよ」と、兵十に知ってほしかったから明くる日も



教育最前線

# 子どもの 「言語力」 を育む さまざまな 取り組み



えりぐち だいすけ  
江里口大輔  
兵庫教育大学附属小学校教諭

## 「かわり」の中で 学びを豊かにするために

### 私

私たちは、もの考える時、五感で感じたことを認識・整理する時、またそのような思考を他人に伝える時にことばを使います。子どもたちの思考は、ことばを基に構成されていることがほとんどです。

附属小学校では「かわり」を大切にしてきました。すなわち、「ひとものこと」との「かわり」における相互作用の中に、子どもたちが学ぶ意味や価値を見いだそうとしてきました。この相互作用の中で、ことばで表現することを大切にしてきました。なぜなら、考えたこと、感じたことをことばで表現することにより、自分自身で自覚することができ、他者に伝えることにより、共有できるからです。

附属小学校国語部では、これまでイメージを中核に据え、子どもの理解と表現をつなぐ実践を重ねてきました。加えて、イメージとともに「言語感覚」にも着目し、それを磨くことによって、子どもの理解と表現